年間第 13 主日　ルカによる福音　2013/7/7

10:1 （そのとき）主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりのすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。

10:2 そして、彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。

10:3 行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。

10:4 財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。

10:5 どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。

10:6 平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。

10:7 その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな。

10:8 どこかの町に入り、迎え入れられたら、出される物を食べ、

10:9 その町の病人をいやし、また、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。

10:10 しかし、町に入っても、迎え入れられなければ、広場

に出てこう言いなさい。
10:11 『足についたこの町の埃（ほこり）さえも払い落として、あなたがたに返す。しかし、神の国が近づいたことを知れ』と。
10:12 言っておくが、かの日には、その町よりまだソドムの方が軽い罰で済む。」
10:17 七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」
10:18 イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。
10:19 蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。
10:20 しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

＜72 人なのか 70 人なのか＞
1 節の 72 人は 70 人となっている別の写本もあります。72 は 12 の 6 倍、十二使徒の 6 倍、70 は聖なる数 7 の 10 倍どっちにしても縁起がいいので人数の違いは気にしていなかったのですが、今回聖書の読み比べをしていたら、新共同訳は 72 人、新改訳では 70 人となっていたのでびっくり

しました。（注１）どっちかに統一しておけばいいのに、小さなところで対立しているよう思います。一致がおとずれることを祈りましょう。
＜この記事はいつごろ、どこでおきた出来事なのか＞
先週から「ルカの旅行記」またの名を「ルカの大挿入」の箇所を読んでいますが、この箇所も「いつ、どこで」が先週と同じようにはっきりしません。
ルカは 9 章 1-6 節で「12 弟子の派遣」をすでに記しているので「弟子の派遣」に関しては二回目となります。「12 弟子の派遣」はマルコ･マタイにも並行記事があります。
72 人の派遣の記事はルカ独自のものです。しかしこれをマタイの「12 人の派遣」と詳細に比べてみると記事がダブっているところもあります。人数以外では内容は似ているのです。弟子の派遣についてはマタイ・マルコは一回のみ、人数は 12 人となっていますが、ルカは派遣は 2 回、12 人と 72 人として福音書に書いたということです。なぜ派遣は 2 回、そして二回目は 72 人としたのでしょうか。
積極的には明言していませんが、消極的にルカの 72 人の派遣の記事をうたぐっている学説も多いようにおもいます。
「モヤモヤ感」はそんなところにもあるのかなあ。
＜なぜ 72 人の派遣なのか＞
イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人

の町に入ってはならない。むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい」マタイ 10:5-6
12 人の派遣はイエスのガリラヤ伝道の最後に 12 人を選び、ユダヤ人に向けておこなわれました。これは共感福音書に共通しています。そのことからこの出来事の歴史性（注 2）が高くなります。
イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。ルカ 9:51-52
72 人の派遣はイエスがガリラヤでエルサレムに行くと宣言したあとの出来事ですからふつうに考えれば、ガリラヤ以外の地方になります。
じゃあどこに派遣したのかというと「自分のいくつもりのところ」と漠然としています。ですが、突然 13-16 節（本日の省略箇所、イエスが町々を叱っている）コラジン、ベトサイダ、カファルナウムというガリラヤの地名がでてきて、つじつまが合いません。
イエスはガリラヤで病人を治し、罪を赦し、人々に神の国を説いて大勢に歓迎されました。ガリラヤはイエスの地元です。イエスが急に滅んでしまえと呪うのは異様です。
時代はすこしくだりますが、西暦 70 年のエルサレム陥落のあと、ガリラヤにはユダヤ人指導部の本部がおかれまし

た。ローマに敗れたユダヤ教正統派がガリラヤにくだり、おそらくはそこいにたイエス支持者たちを制圧して再建ユダヤ教の牙城となったのではないでしょうか。ガリラヤの町を叱るイエスの言動にはこのような背景、この史実を踏まえると解しやすくなります。

＜復活のイエスの仕事＞

10:1 その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりのすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。

1 節では「イエス」のかわりに「主」、12 人のかわりに「72 人」、と記され、「行くつもりのすべての町や村」、「先に遣わす」とあります。

72 人の派遣を受難前のイエス、史的イエスの出来事ではなく、受難後のイエス、復活の主の仕事としてみるとこの福音箇所のツジツマがあってきます。はなしが見えてきます。

72 人の名前はないのはあたりまえで、つまり無名の大勢の伝道師が主によって働き手として立てられ、狼の群れに突入し、お金は持たずにはだしで、挨拶なしで、福音を伝える、なんか一世紀ごろの宣教の現実味をおびてきませんか。

また 18 節以下のサタンが落ちた、蛇やさそり、権威を授けた、害は加えられない、天に名が記される、という表現も受難後に成立した教会のドグマならばぴったりはまります。

＜マルコの福音のつけたし＞

16:8 婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を

失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。
マルコの福音は 16 章で終わる短いものです。その最後の一文を引用しました。からの墓を見つけたのは婦人たちの反応「恐ろしかった」で終わっています。
この尻切れトンボのエンディングで納まりがつかなかったのは、マタイであり、ルカであり、ヨハネであって、復活のイエスの記事を福音書に書きました。特にルカは序文で「詳しく」「順序正しく」とマルコ批判と思われる文章を書きのこしています。
そして、マルコの福音書には 3 世紀ごろには「つけたし」の部分が成立して当時の教会で用いられだしました。現代訳聖書にも「つけたし」（注３）としてのっています。
このつけたしが今日の聖書箇所にぴったりと符号するからです。9 節以下をご覧ください。マルコのつけたしを朗読するのでルカを目で追いながら聞いてください。
それから、イエスは言われた。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。
信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。信じる者には次のようなしるしが伴う。彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る。手で蛇をつかみ、また、毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば治る。」主イエスは、弟子たちに話した後、天

に上げられ、神の右の座に着かれた。一方、弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実であることを、それに伴うしるしによってはっきりとお示しになった。
あきらかにマルコ福音書の「つけたし」部分はは復活の主、復活のイエスの出来事として記されています。
＜結論＞
福音書はいわゆる歴史書ではありません。そこには事実が書いてあるのではなく真実が書いてあります、というのがキリスト教の弁明の基本です。
ただ、きょうの 72 人の派遣のはなしはあまりにも脚色がつよく、どうせならルカの次回作「使徒言行録」で扱えばわかりやすいのにと感じます。とくに黙示文学の終末観、信じなければ滅びるという内容がただの脅し文句として残る印象が強いことが残念です。
ルカの「72 人の派遣」は現実のイエスの話ではなく、復活の主の出来事だとわたしは思います。
逆説的になりますが、それだからこそ「福音」なのです。
ありえないことがおこることはわたしたちは生活の中でしばしば体験します。それはよい事ではなくて、たいていは悪いことです。福音書にはありえないことがおこったことが記されています、そして福音とはそれが悪いことではなく「よい知らせ=福音」なのです。

注

１．新約聖書の底本はネストレ・アーラント（Nestle-Alan d）略して NA のギリシア語新約聖書テキストを使っています。現在は 28 版まで出版されています。翻訳聖書の違いはネストレ版の版元（27 版だったり 26 版だったりという違い）でおきるようです。わたしの手元には NA27 版をもとにした「J バイブル（いのちのことば社）」で、この人数を調べたところ 70 人となっていました。だとすると新共同訳は 27 版をもとに翻訳しているので 70 人になるはずですが、72 人としたのはなにか理由があるのでしょう。

２．「歴史性が高い」

われながらへんないいまわしだと思うので、説明します。

たとえば徳川家康が実在したかということに関して疑いを持つ人は少ないと思います。学校で習ったり、テレビの時代劇で見たりして実在を疑う理由がみあたらないからです。また、実際に江戸城があったり徳川家康に関する文書も敵方のものや身内のものなど多数あるので実在が確認できます。

昔のことに関してその証拠となるものが多数あると一般的には歴史性は保証される、そのことを「歴史性が高い」という言い方で表現しました。この場合ですと 12 弟子の派遣は実際にあったのかどうか、歴史上の出来事なのかという事に関して 3 つの福音書に書いてあるからほんとうだろう、あったの

だろうと推測しています。

３．マルコのつけたし

長いつけたしと短いつけたしの 2 種類があります。さきほどは長いつけたしを引用したので、以下に短いつけたしを記します。

〔婦人たちは、命じられたことをすべてペトロとその仲間たちに手短に伝えた。その後、イエス御自身も、東から西まで、彼らを通して、永遠の救いに関する聖なる朽ちることのない福音を広められた。アーメン。〕